

# 青年期における未熟な恋愛関係について

めぐろ学校サポートセンター

川崎こども心理ケアセンター開設準備室

横浜国立大学

横浜国立大学

吉岡寛子

下田愛

川下さゆり

井上果子



## 青年期における未熟な恋愛関係について

吉岡 寛子\*・下田 愛\*\*・川下 さゆり\*\*\*・井上 果子\*\*\*

### 問題

青年期は、異性と交際し親密な関係を作っていく時期であり(伊福・徳田, 2008)、異性との恋愛関係を構築し維持することは、青年の人格発達や日常生活に強く影響を及ぼすとされている(松井, 1996; 詫摩, 1986など)。恋愛関係の及ぼす影響について高坂(2009)は、アイデンティティのような人格発達の変数が関わっている可能性を指摘している。

### 1. アイデンティティ理論からみた青年期の恋愛関係

Erikson(1950)は、「青年期の恋愛は、その大部分が、自分の拡散した自我像を他人に投影することにより、それが反射され、徐々に明確化されるのを見て、自己の同一性を定義付けようとする努力である」と述べている。さらに、Erikson(1959)は「真の親密さが可能になるのは、適切な同一性の感覚が確立した後だけである」と指摘している。

Eriksonの考えを踏まえて大野(1995)は、青年期における「親密性が成熟していない状態で、かつ、アイデンティティの統合の過程で、自己のアイデンティティを他者からの評価によって定義づけようとする、補強しようとする恋愛的行動」を「アイデンティティのための恋愛」と定義している。その特徴として大野は、①相手からの賞美・賞賛を求めたい(「好きだ、綺麗だ」と言って欲しい)、②相手からの評価が気になる(「私のことを

どう思う」という)、③しばらくすると、呑み込まれる不安を感じる、④相手の挙動に目が離せなくなる(「相手が自分のことを嫌いになったのではないか」と気になる)、⑤結果として交際が長続きしないことが多い、という5つを挙げている。これらの特徴から、アイデンティティが未確立である青年期の恋愛関係は真の親密な二者関係を構築できているとは言い難く、「未熟な恋愛関係」と捉えることができよう。

恋愛とアイデンティティとの関連について、北原・松島・高木(2008)は、恋愛がアイデンティティ確立に与える影響として「恋人をモデルとすることによる影響」「恋人からの直接的な言葉による影響」「恋人が無条件に認めてくれる、味方でいてくれることによる影響」の3つを挙げている。しかしながら、アイデンティティ理論から恋愛関係を検討している研究は数少なく(高坂, 2010)、さらなる検討が必要であると考えられる。

アイデンティティが未確立である青年の恋愛関係を「未熟な恋愛関係」と考えた場合、「成熟した恋愛関係」について考える必要がある。返田(1986)は成熟した愛とは他者や世界に開かれているものであると主張している。さらに返田は「恋愛することによって世界全体の意味が変わり、世界や自己の新しい意味づけがなされる」と述べている。また、西平(1981)は、自己に関心を置いたものを「閉じた愛」、一方相手に関心を置いたものを「開いた愛」と表現している。つまり、成熟した愛とは、二人だけの閉ざされた関係ではなく、相手との関係を基盤として、外の世界へと開かれている関係であると考えられる。加えて、

\*めぐろ学校サポートセンター

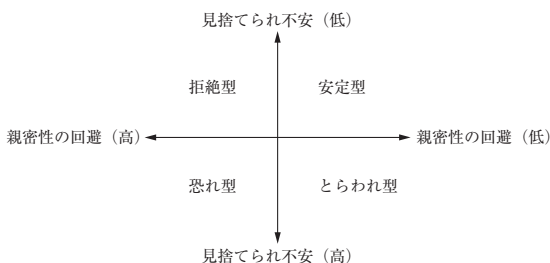
\*\*川崎こども心理ケアセンター開設準備室

\*\*\*横浜国立大学

Fairbairn (1952) は、対象関係の発達を「対象への成熟した依存に少しずつ席を譲っていくプロセス」であるとし、「互いに平等に依存し合っている2人の分化をとげた個体同士の、釣り合いのとれたギブ・アンド・テイクの関係」を重要視している。これは、Eriksonの「真に親密な関係を築くためにはアイデンティティの確立が必要である」とする考えと類似している。これらを踏まえると、「成熟した恋愛関係」とはアイデンティティが確立されており、2人の間で釣り合いの取れている、外界に開かれた関係と考えられる。

## 2. 愛着スタイルから見た青年期の恋愛関係

成人期の愛着のパターンには、4つのカテゴリーモデルが認められる (Bartholomew, 1990 ; Bartholomew & Horowitz, 1991)。ここで重要となる内的作業モデル (Internal Working Model) は、子どもが愛着対象との日常的で長期的な相互作用を通して形成していく心的表象である。乳幼児はまず他者への心的表象 (他者モデル) を形成し、その後に自己への心的表象 (自己モデル) を形成する (金政, 2007)。Brennan, Clark, & Shaver (1998) は、自己モデルのネガティブさは“見捨てられ不安 (関係不安)”の高さとして、他者モデルのネガティブさは“親密性の回避”の高さとして捉える事が可能であると言及している。この、自己と他者に対する主観的な信頼感の高低を組み合わせたものが安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型の4つのモデルである (Figure 1)。



安定型は自己・他者モデルともにポジティブなスタイル、拒絶型は自己モデルがポジティブで他者モデルがネガティブなスタイル、とらわれ型は自己モデルがネガティブで他者モデルがポジティブなスタイル、恐れ型は自己・他者モデルともにネガティブなスタイルである。中尾・加藤 (2004) はBrennan et al. (1998) が作成した親密な対人関係体験尺度 (Experiences in Close Relationships inventory、以下 ECR) を日本語訳し、日本語版 ECRとして「成人愛着スタイル尺度」を作成している。更に、中尾・加藤 (2006) は、愛着スタイルと愛着行動の関係について研究を行っている。

愛着スタイルと恋愛関係、親密な関係についての検討は数多くなされている (詫摩・戸田, 1988 など)。金政・大坊 (2002) は、愛着スタイルと愛情との関連について検討を行い、安定型の愛着スタイルは愛情と正の関連を示すと指摘している。また、金政 (2003) は、愛着スタイルが青年期における恋愛へのイメージに影響を与えていると述べている。そこで本研究では、愛着スタイルの観点から青年期における未熟な恋愛関係の検討を行う。

### 目的

青年期における未熟な恋愛関係を測る尺度を作成し、その特徴を検討する。

### 方法

#### 1. 調査協力者及び調査時期

調査協力者は、学部生・大学院生194名 (うち男性116名、女性72名、性別未回答6名、平均年齢19.83歳、標準偏差1.50) であった。調査は2013年6月から7月に実施した。

#### 2. 調査方法

個別に研究目的、調査方法等の説明を行い、協

力を依頼した。合意を得た上で質問紙を配布、実施した。個人情報の扱い等については質問紙のフェイスシートに記述し、確認した上で回答を依頼し、回答をもって同意したこととした。実施時間は10分から20分であった。本調査の質問紙の構成をTable 1に示す。

Table 1 質問紙の構成

1.	属性
2.	「青年期における未熟な恋愛関係」尺度候補項目（独自作成）45項目
3.	成人愛着スタイル尺度（中尾・加藤，2004）26項目

### ①属性

所属学部、年齢、性別の記入を求めた。

### ②青年期における未熟な恋愛関係に関する候補項目（独自作成）45項目

大野（1995）による「アイデンティティのための恋愛」の5つの特徴をもとに、青年期における未熟な恋愛関係を測る項目を選定し、作成した。心理学を専攻する大学院生や学部生計3名とともに内容や文言を吟味し、45項目を作成した。回答は、「1. まったくあてはまらない」「2. ややあてはまらない」「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」「5. よくあてはまる」の5件法で回答を求めた。項目内容をTable 2に示す。

### ③成人愛着スタイル尺度（中尾・加藤，2004）26項目

中尾・加藤（2004）が作成した尺度を使用した。この尺度は、成人の恋人に対する愛着スタイルを測定するものであり、「親密性回避」「見捨てられ不安」の2つの下位尺度から構成されている。本研究では青年期における未熟な恋愛関係を測定する尺度の妥当性を検討するために使用し、原論と

同様に「1. 全く当てはまらない」から「7. 非常によくあてはまる」までの7件法で回答を求めた。

## 結果

### 1. 「青年期における未熟な恋愛関係尺度」因子分析

未熟な恋愛関係に関する候補項目について、「よくあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「ややあてはまらない」を2点、「まったくあてはまらない」を1点と得点化し、平均値と標準偏差を算出した。平均値±標準偏差から天井効果およびフロア効果を求めたところ、いくつかの項目でフロア効果が見られた。項目内容を吟味したうえ、尺度作成上必要な項目であると判断し、残すこととした。

探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、解釈可能性から3因子を抽出した。回転前の固有値の推移は、10.074、4.185、2.693、1.828…であった。したがって、3因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を繰り返し、因子負荷量が0.4を下回った24項目を分析の過程で除外した。最終的に採用された21項目のプロマックス回転後の因子パターンと因子間相関をTable 3に示す。

第1因子は6項目で構成されており、「恋人ともし別れたら、生きていけないと思う」、「常に恋人といっしょにいないと不安である」など、恋愛関係において恋人との密着を求める内容の項目が高い負荷量を示した。そこで、この因子は「癒着」因子と命名された。

第2因子は7項目で構成されており、「恋人となかなか心から親しくなれない」、「恋人とは浅く付き合っている」など、恋愛関係を持つてはいるものの恋人とより親密な関係になることを自ら避け、表面的な関わりにとどめているという内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、この因

Table 2 「青年期における未熟な恋愛関係尺度」候補項目

- 
- 1 常に恋人といっしょにいないと不安である
  - 2 恋愛関係の維持のために、自分さえ我慢すればいいと思ったことがある
  - 3 自分の心に壁を作ってしまう、恋人をよせつけないところがある
  - 4 自分が恋人を好きかどうかよりも、恋人が自分を好きかどうかの方が重要である
  - 5 恋人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい
  - 6 恋人との関係が悪くなると、他のことが何も手につかなくなる
  - 7 私を本当に思ってくれる恋人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである
  - 8 恋人とは浅く付き合っている
  - 9 本当の彼（彼女）をわかってあげられるのは自分だけだと思う
  - 10 恋人にいつか裏切られるのではという不安を感じることもある
  - 11 自分のことより恋人のことを優先して考えてしまう
  - 12 恋人から愛されていることに自分の存在価値はあると思う
  - 13 恋人の行動や持ち物などを、逐一知っていないと不安になる
  - 14 恋人に対して、最初はとても信頼できると思っても、あとで失望することが多い
  - 15 完全に一心同体になれる恋人を求めている
  - 16 日常生活で恋人といない時でも、恋人のことをよく考えている
  - 17 恋人に対する評価がころころと変わる
  - 18 恋人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い
  - 19 まわりから「別れた方が良い」といわれても、どうしても別れられない
  - 20 恋人となかなか心から親しくなれない
  - 21 恋人が誰か他の人にも関心があるのではないかと疑うと、落ち着いていられない
  - 22 まわりから恋人を非難されたくないがために、恋人の話題を必死に避けようとしたり、恋人のために必死で弁解していることがある
  - 23 恋人との時間を何よりも優先しそのために自分の時間がなくなっても構わない
  - 24 恋人を喜ばせることばかりを考えている
  - 25 恋愛関係は、常に連絡を取っていないと途切れてしまうように感じる
  - 26 別れる・別れないで長い期間もめている。
  - 27 恋人からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じた時には悩み苦しむ
  - 28 恋人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく
  - 29 恋人の予定に合わせて自分の予定を立てている
  - 30 恋人に何かにつけて置いてきぼりにされそうで、よく心配になる
  - 31 2人の関係についての主導権は相手が握っている
  - 32 自分に自信がないので、恋人から離れるのは不安である
  - 33 特定の人もしくは誰からでもいいから、愛されていることを実感したい
  - 34 恋人には常に私を認め、受け入れてほしい
  - 35 ひょっとして恋人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくことがある
  - 36 恋人がつまらなさそうにしていたり、機嫌が悪くなると自分のせいだと感じる
  - 37 恋愛関係は2~3ヶ月、またはそれより短時間で終わることが多い
  - 38 恋人には、いつも私のことだけを考えていてほしい
  - 39 恋人ともし別れたら、生きていけないと思う
  - 40 恋人に嫌われたくないので、恋人の意見には反対しない
  - 41 恋人との関係を、繰り返し自分から終わらせようとしてしまうことがある
  - 42 自分が思っているほど恋人が自分のことを想ってくれていないのではと不安になる
  - 43 恋人と接するとき、恋人の顔色をととても気にする
  - 44 「好き」「愛している」「あなたが必要だ」などの言葉に非常に弱い
  - 45 電話やメールの返事がこない、自分のことをそんなに好きではないのではと不安になる

Table 3 「青年期における未熟な恋愛関係尺度」候補項目  
因子分析（主因子法・プロマックス回転）

	I	II	III	平均値
<b>癒着 (<math>\alpha=.80</math>)</b>				
恋人ともし別れたら、生きていけないと思う	.815	.025	-.047	1.97
常に恋人といっしょにいないと不安である	.775	-.119	.071	2.17
恋人には、いつも私のことだけを考えていて欲しい	.670	.082	.046	2.21
恋人の行動や持ち物などを、逐一知っていないと不安になる	.622	.148	-.053	2.21
恋愛関係は、常に連絡を取っていないと途切れてしまうように感じる	.545	.122	-.009	2.44
本当の彼（彼女）をわかってあげられるのは自分だけだと思う	.463	-.116	.013	2.45
<b>表層的 (<math>\alpha=.75</math>)</b>				
恋人となかなか心から親しくなれない	-.096	.767	.061	2.28
恋人とは浅く付き合っている	-.061	.657	-.217	2.24
恋人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い	.054	.644	.048	2.27
恋人に対する評価がころころ変わる	.101	.541	-.105	2.60
自分の心に壁を作ってしまう、恋人をよせつけないところがある	-.147	.512	.147	2.67
恋愛関係は2~3ヶ月、またはそれより短期間で終わることが多い	.174	.442	-.108	2.19
恋人に対して、最初はとても信頼できると思っても、あとで失望することが多い	.160	.424	-.019	2.79
<b>過度の愛情希求 (<math>\alpha=.80</math>)</b>				
恋人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい	-.058	-.085	.749	3.64
「好き」「愛している」「あなたが必要だ」などの言葉に非常に弱い	.006	-.059	.651	2.90
恋人と接するとき、恋人の顔色をととても気にする	-.141	.219	.525	3.04
自分が思っているほど恋人が自分のことを想ってくれてないのではと不安になる	-.044	.269	.517	2.98
恋人からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じた時には悩み苦しむ	.195	.121	.513	2.80
自分が恋人を好きかどうかよりも、恋人が自分を好きかどうかの方が重要である	-.010	-.178	.495	3.23
恋人との関係が悪くなると、他のことが何も手につかなくなる	.292	.021	.477	2.97
恋人から愛されていることに自分の存在価値はあると思う	.131	-.152	.476	3.12
	因子間相関			
	I	II	III	
	—	.105	.475	
	II	—	.259	
	III		—	

子は「表層的」因子と命名された。

第3因子は8項目で構成されており、「恋人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい」、「好き・愛している・あなたが必要だなどの言葉に非常に弱い」など、恋愛関係において恋人からの愛情表現を強く求める内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、この因子は「過度の愛情希求」因子と命名された。

以上の3つの因子のそれぞれに負荷量の高い項目によって各因子に対応する下位尺度を作成し、尺度全体を「未熟な恋愛関係尺度」と命名した。各下位尺度の内的整合性を検討するため $\alpha$ 係数

を算出したところ、「癒着」で.80、「表層的」で.75、「過度の愛情希求」で.80と十分な値が得られた。また、尺度全体の $\alpha$ 係数も.84と十分な値が示された。

下位尺度について構成される項目の平均値をみると、「癒着」は全体的にやや低く、「過度の愛情希求」は全体的にやや高い値が示された。

## 2. 成人愛着スタイル尺度

成人愛着スタイル尺度の得点化については、原論文（中尾・加藤，2004）にしたがって行った。成人愛着スタイル尺度について原論文と同様に探

Table 4 成人愛着スタイル尺度の因子分析結果  
(最小2乗法・バリマックス回転)

	I	II	平均値
<b>親密性の回避 (<math>\alpha=.89</math>)</b>			
私は、恋人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない	-.803	.008	3.62
私は恋人に頼ることに抵抗がない	-.737	.003	3.75
私は恋人になぐさめや元気づけたりすることをふくめ、いろんなことで助けを求める	-.701	.138	3.76
私は、あまり人に話さないような自分の考えや気持ちを恋人に話すことに抵抗がない	-.636	.060	3.61
私はたいてい、自分の問題や心配事を恋人と話し合う	-.633	.025	3.64
困った時恋人に助けを求めると、何かちよつとは(状況が)よくなる	-.630	.068	3.49
私は恋人と親密になることがとても快い	-.617	.150	2.74
私は恋人に心を開くのに抵抗を感じる	.613	.326	2.92
私は恋人に何でも話す	-.609	.114	3.82
私は恋人とあまりに親密になることがどちらかという好きではない	.555	.183	2.90
私は恋人とあまり親密にならないようにしている	.540	.246	2.66
私は、恋人が非常に親密になりたがってくると、いごち悪く感じる	.523	.292	2.96
私は恋人があまりに自分と親密になってくると、とてもイライラしてしまう	.485	.218	2.76
心の奥底で何を感じているかを恋人に見せるのはどちらかという好きではない	.473	.167	3.76
私は恋人と親密になりたいのだが、いつの間にかついつい後ずさりしていることが多い	.456	.410	3.45
私は自分が恋人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う	.302	.123	3.78
<b>見捨てられ不安 (<math>\alpha=.87</math>)</b>			
私は、恋人を失うのではないかとけっこう心配している	.008	.851	3.63
私が恋人のことを大切に思うほどには、恋人が私のことを大切に思っていないのではないかと心配する	.003	.773	3.71
私は見捨てられるのではないかと心配だ	-.023	.745	3.84
私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する	.006	.725	3.52
私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるために、ときどき恋人はうんざりして私から離れていってしまう	.172	.677	2.92
私が恋人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき恋人はうんざりして私から離れていってしまう	.173	.647	2.95
私は、私が親密になりたいと望むほどには恋人は私と親密になりたいと思っていないと思う	.077	.584	3.45
私は、(恋人に)見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない	-.056	-.583	4.30
私はいつも、恋人が私に対していてくれる気持ちが、私が恋人に対していてほしい気持ちと同じくらい強ければいいのになと思う	-.245	.487	4.29
恋人が私と親密になろうとするやいなや、私は自分から恋人との距離を取ろうとしている自分に気付く	.347	-.415	3.29
	<b>負荷量の平方和</b>	7.82	3.22
	<b>寄与率</b>	23.00	9.47

索的因子分析(最小2乗法・バリマックス回転)を行った結果、解釈可能性から2因子を抽出した。2因子の累積寄与率は32.46%であった。回転前の固有値の推移は、6.94、4.61、2.67...であった。「見捨てられ不安」に「親密性の回避」項目、「恋人が私と親密になろうとするやいなや、私は自分から恋人との距離を取ろうとしている自分に気付く」

が含まれたが、原論文の尺度名を採用した(Table 4)。逆転項目を処理した後、下位尺度の内的整合性を検討したところ、 $\alpha$ 係数は「親密性の回避」で.89、「見捨てられ不安」で.87と十分な値が得られた。



### 3. 相関係数

青年期における未熟な恋愛関係尺度について、それぞれの因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出して、各下位尺度得点とした。各下位尺度得点の平均値と標準偏差は、「癒着」が平均 = 2.24、SD = 0.79、「表層的」が平均 = 2.42、SD = 0.69、「過度の愛情希求」が平均 = 3.09、SD = 0.74となった。

成人愛着スタイル尺度の因子分析結果においても、逆転項目を処理した上で、各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を算出して、各下位尺度得点とした。各下位尺度得点の平均値と標準偏差は、「親密性の回避」が平均 = 3.36、SD = 0.96、「見捨てられ不安」が平均 = 3.59、SD = 1.08となった。次に、作成した尺度の妥当性を検証するため、成人愛着スタイル尺度との相関を算出した。その結果を Table 5 に示す。

「親密性の回避」と「表層的」の間に有意な正の相関が、「癒着」との間に有意な負の相関がみられた。また、「見捨てられ不安」は「癒着」「表層的」「過度の愛情希求」の全てとの間で有意な正の相関がみられた。

#### 考察

##### 1. 青年期における未熟な恋愛関係尺度の因子分析について

青年期における未熟な恋愛関係尺度の因子分析(主因子法・プロマックス回転)の結果、「癒着」

「表層的」「過度の愛情希求」という3つの因子が抽出された。このことから、青年期の未熟な恋愛関係は3つの構成要素からなるといえる。

次に各因子の特徴を検討するために、各因子の項目内容と「アイデンティティのための恋愛(大野, 1995)」の特徴との比較を行う。

第1因子「癒着」の項目には、「恋人ともし別れたら生きていけないと思う」「常に恋人といっしょにいないと不安である」など、恋愛関係において過度に恋人との一体化を求めている内容が含まれている。さらに、過度の一体化を求めが故に、「恋人の行動や持ち物などを、逐一知っていないと不安になる」「恋愛関係は、常に連絡を取っていないと途切れてしまうように感じる」といった、相手の挙動に必要以上に意識を向けてしまうといった内容も含まれていることが明らかになった。これらの項目は、「アイデンティティのための恋愛(大野, 1995)」における「相手の挙動に目が離せなくなる」と一致している。

第2因子「表層的」の項目には、「恋人となかなか心から親しくなれない」「恋人とは浅く付き合っている」など、恋人とより親密な関係になることに不安を感じ、自ら回避している内容が含まれている。恋愛関係における不安と回避の傾向に対して、大野(1995)は「アイデンティティが不確かなまま他者とごく親しい関係になることで自己存在の基盤がゆすられるような不安(呑み込まれる不安)を感じるため」と考察している。このことか

Table 5 青年期における未熟な恋愛関係尺度と成人愛着スタイル尺度の相関係数

		I	II	III	IV	V
未熟な恋愛関係尺度	I. 癒着	—	.11	.48***	-.27***	.34***
	II. 表層的		—	.26***	.57***	.47***
	III. 過度の愛情希求			—	-.08	.66***
成人愛着スタイル尺度	IV. 親密性の回避				—	.21**
	V. 見捨てられ不安					—

\*p < .01, \*\*\*p < .001

ら、第2因子は「アイデンティティのための恋愛(大野, 1995)」における「しばらくすると、呑み込まれる不安を感じる」と一致している。また、第2因子には「恋愛関係は2-3ヶ月、またはそれより短期間で終わることが多い」という項目も含まれており、呑み込まれる不安が高まり「結果として多くの場合交際が長続きしない」という大野(1995)の指摘とも合致している。

第3因子「過度の愛情希求」の項目内容では、「恋人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい」「好き・愛している・あなたが必要だなどの言葉に非常に弱い」「恋人からの愛情が、ほんのわずかでも欠けていると感じた時には悩み苦しむ」など、自分が恋人に愛されていることに最大の関心を向けている。つまり、自分が相手を愛しているか否かよりも相手が自分を愛しているか否かに強い関心を向けているのである。これらの項目は、「アイデンティティのための恋愛(大野, 1995)」における「相手からの賞美・称賛を求めたい」「相手からの評価が気になる」と一致している。

## 2. 青年期における未熟な恋愛関係尺度と成人愛着スタイル尺度との相関係数について

青年期における未熟な恋愛関係尺度と成人愛着スタイル尺度との相関を算出したところ、「表層的」と「親密性の回避」の間に有意な正の相関がみられ、「癒着」「表層的」「過度の愛情希求」と「見捨てられ不安」との間で有意な正の相関がみられた。

青年期における未熟な恋愛関係尺度における「表層的」は、その項目内容から「恋人と親密な関係になることを自ら回避し表面的に付き合う」ことを意味する。「親密性の回避」と正の相関がみられたことから、アイデンティティが不確かな青年期の恋愛関係において恋人との親密な関係を回

避するという側面があることが示唆された。また、「癒着」と「親密性の回避」との間で負の相関が見られたことに関して、恋人との過度の一体化を求めるということは自他の区別がないとも考えられるため、親密性の回避という点において負の相関がみられたと考える。

特徴的なことは、青年期における未熟な恋愛関係尺度における全ての低位尺度と成人愛着スタイル尺度における「見捨てられ不安」との間に正の相関がみられたことである。このことから、青年期における未熟な恋愛関係はその表出形態に違いはあるものの、見捨てられ不安の高さが強く関係していると推察する。

未熟な恋愛関係尺度の各因子について、「癒着」はBrennanの愛着の4カテゴリーモデルの内、自己モデルがネガティブで他者モデルがポジティブである“とらわれ型”と考えられる。中尾・加藤(2006)は、とらわれ型の者は主観的安全感を直接的に表現するが対他調整にとらわれてしまうため、他者の反応や状況が異なると愛着行動に対して必要以上の自己制御を行うと述べている。つまり、「癒着」は、恋人に対して一体化を求めるなどの直接的な愛着行動を行うものの、常に相手に見捨てられるのではないかという不安を抱き続け、恋人との心理的な距離の調整に過剰に意識を向けてしまう“とらわれ型”の行動パターンを有していると推察できる。

一方で、「表層的」は「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の双方の間で正の相関がみられたことから、Brennanの愛着の4カテゴリーモデルの内、自己モデルも他者モデルもネガティブである“恐れ型”であると考えられる。中尾・加藤(2006)は、恐れ型の者は愛着行動を行いたいと考えているため他者の反応や状況によっては(拒絶型に比べて)愛着行動を行おうとするが、一方で対他調整にとらわれてしまうため、結果としては愛着行

動を行わないことが多い（愛着行動を抑制してしまう）と指摘している。本尺度における「表層的」は、恋愛関係を持つてはいるが恋人と親密になることを回避し浅い付き合いをしていると解釈できることから、中尾・加藤（2006）の“恐れ型”における行動パターンと合致すると考える。

「過度の愛情希求」に関しては、「見捨てられ不安」と正の相関がみられたが、「親密性の回避」との間には相関がみられなかった。このことから、「過度の愛情希求」はBrennanの愛着の4カテゴリーモデルの内、自己モデルがネガティブである“とらわれ型”もしくは“恐れ型”であると考えられる。中尾・加藤（2006）は、自己モデルがネガティブである者は、自己を傷つけないように愛着行動が不自然なあるいはぎこちない形態になると述べている。さらにBartholomew & Horowitz（1991）は、不安が高いほど、自己観を保つために他者からの承認を必要としていると指摘している。つまり、自己モデルがネガティブである「過度の愛情希求」は、恋愛関係において恋人からの自己観を保持する（恋人からの承認により自己観を維持する）行動パターンをとると推察できる。

### 3. 総合考察と今後の展望

作成した「青年期における未熟な恋愛関係尺度」を構成する3つの下位尺度は、それぞれが「アイデンティティのための恋愛（大野, 1995）」の特徴を有しており、尺度全体で「アイデンティティのための恋愛」の5つの特徴を満たしていると考えられる。3つの下位尺度に共通している点としては、自分自身を映す鏡のように恋人を扱い、表面的には相手に関心が向いているように見えても、本質的には相手にではなく自分自身に最大の関心が向いていることが挙げられる。恋人を鏡のように扱うことに関して、大野（1995）は、「アイデンティティの課題を残している青年は自分のことで頭が

いっぱい相手のことまで考える余裕がなく、親密性にエネルギーが使えない状態にある」と指摘している。つまり、アイデンティティが未確立であるが故に、相手ではなく自分自身に関心が集中し、結果として未熟な恋愛関係を構築してしまうと考えられる。

恋人を鏡のように扱っているという共通点に加えて、過度に密着関係を求めたり親密になることを回避したりと、3つの因子から読み取れる恋愛関係は恋人との平等かつ適切な距離が欠如しているという特徴もある。アイデンティティが確立されており、2人の間で釣り合いの取れた恋愛を「成熟した恋愛関係」と捉えた場合、本尺度で測定される恋愛はアイデンティティが不確かであり、2人の間で平等かつ適切な距離が欠如している関係と考えられ、「未熟な恋愛関係」と位置づけられる。

アイデンティティ理論から青年期の恋愛関係を検討するに際して、大野（1995）は十数年間に収集した受講生のレポートを質的研究法で分析しているが、より多くのデータを収集し実証的に検討を進めていく上で、本研究で作成した尺度は有用であると考えられる。

本研究では作成した尺度と愛着スタイルとの相関関係を検討しているが、これまで恋愛関係との関連が指摘されてきた愛着の4分類では、未熟な恋愛関係の3つの構成要素は十分に説明しきれず、また因果関係なども不明確である。今後は、青年期における未熟な恋愛関係と愛着スタイルとの因果関係の検討等に加え、他の概念との関連についても研究を深める必要があるだろう。

### 引用文献

Bartholomew, K. (1990). Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.

- Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Brennan, K. A., Clark, C. L. & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of attachment: An integrative overview. J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.) *Attachment Theory and Close Relationships* New York: Guilford Press. pp. 46-76.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton. (仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press, Inc, New York (小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Fairbairn, W. R. D. (1952). *Psychoanalytic Studies of the Personality*. London: Tavistock Publications Limited. (山口泰司 (訳) (1986) 人格の対象関係論 文化書房博文社)
- 伊福麻希・徳田智代 (2008). 青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討 久留米大学心理学研究, 7, 61-68.
- 金政裕司・大坊都夫 (2002). 青年期の愛着スタイルと恋愛へのイメージ—青年期の愛着スタイルと親密な異性関係 (1) — 日本心理学会第66回大会発表論文集, 187.
- 金政裕司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望—現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは— 対人社会心理学研究, 3, 73-84.
- 金政裕司 (2007). 青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連 社会心理学研究, 22, 274-284.
- 北原香緒里・松島公望・高木秀明 (2008). 恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 10, 91-114.
- 高坂康雅 (2009). 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関係 パーソナリティ研究, 17, 144-156.
- 高坂康雅 (2010). 大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連, 発達心理学研究, 21, 182-191.
- 松井 豊 (1996). 親離れから異性との親密な関係の成立まで 斎藤誠一 (編) 青年期の人間関係 培風館 pp.19-54.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, 75, 154-159.
- 中尾達馬・加藤和生 (2006). 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか? パーソナリティ研究, 14 (3), 281-292.
- 西平直喜 (1981). 青年の世界3 友情・恋愛の探求 大日本図書
- 大野 久 (1995). 自己への問い直し—青年期— 金子書房 pp.89-123.
- 返田 健 (1986). 青年期の心理 教育出版
- 詫摩武俊 (1986). 青年の心理 改訂版 培風館
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論から見た青年の対人態度—成人愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.